

## 当面する肥料の需給状況と

## 今後の問題点について

農林省農蚕園芸局  
肥料機械課長補佐

菊 地 武 三

## (現 状)

50年の6月に昭和49肥料年度が終了しましたが、この年の肥料の需要—統計上は工場出荷数量になりますが一は、前年の石油危機の後遺症が現れたとも云うべき状態だったと云えます。

48年末に発生した石油危機を契機として、肥料についても物不足感或は先高感から、相当の仮需要が発生したものとみられ、その需要は著しく増加し、これが49年いっぱい、すなわち49肥料年度の前半まで続きました。

しかし、石油危機に際して、肥料生産に必要な電力・石油の確保に特別な措置を構じる等、肥料関係者一同その供給につき万全の措置をとり、需要に支障のないよう努めた結果、49肥料年度の後半、50年1月からは、仮需要による在庫の整理に入ったものとみられ、需要が急激に減少し、年間を通じては、48肥料年度の需要を下廻りました。

これを数字でみてみますと、48肥料年度における肥料の需要は、窒素、りん酸、加里の3成分合計で47肥料年度対比111.5%となっており、とくに49年に入ってからの後半の半年は、前年同期比112.2%と前半を上廻る伸びになっております。

これに対し、49肥料年度は、同じく3成分合計で49肥料年度対比91.6%となりましたが、これを年度の前半・後半に分けてみますと、前半では前年同期比113.9%と引続き大巾に伸びたのに対し、後半では前年同期比81.4%と急激に減少をみせております。

49肥料年度の需要を数量で申しますと、3成分合計で約210万トンであり、肥料としての形では600万トンくらいになります。

肥料の需要量は、ここ数年米の生産調整の実施47年の異常気象による世界の食糧需給の窮迫、或は石油危機の発生等の外的要因の影響を受けて、その増減がはげしいのですが、長い目で見た場合には、順調な増加を示しており、今後も需要は減ることはなく、やはり、増える方向にあると思

ます。

このように増加の傾向にあった肥料の需要を、質の面からみてみますと、肥料の種類では、かつての硫安・過りん酸石灰に代って、尿素・よう成りん肥の需要が増えており、さらに単肥としての利用から複合肥料としての利用に代って来ております。硫安・過りん酸石灰などは単肥としての需要よりは、複合肥料としての利用の方が多くなっております。そして複合肥料も、含有成分がより高いものの需要が伸び、いわゆる高度化成の利用の増加が顕著です。

複合肥料がどのような割合で増えて来たか、数字でみてみますと、40肥料年度には、窒素成分の需要量のうち61%が複合肥料であり、複合肥料の48%が高度化成であったものが、10年たった49肥料年度には78%が複合肥料になっており、その中の51%が高度化成になっています。

りん酸成分について云いますと、40肥料年度にはそれぞれ74%、52%であったものが、49肥料年度には79%、70%となっております。また、加里成分の複合肥料の割合は、73%から86%になっています。

次に3成分の需要の割合ですが、窒素成分の需要を100とした時のりん酸成分の割合は、30年代が70台、39年から80台、43年から90台となっており、加里成分は33年に70台となり、35年から80台となっております。

## &lt;目 次&gt;

- § 使命感を自覚しつつ  
細心な注意と適切な対策を……………(1)  
チッソ旭肥料株式会社企画部長 中川 岩 男
- § 当面する肥料の需給状況と  
今後の問題点について……………(2)  
農林省農蚕園芸局肥料機械課長補佐 菊 地 武 三
- § 肥料の物流について……………(4)  
全国農業協同組合連合会  
肥料農業部総合課長 吉見 康 宏
- § イチゴの新品種とその特性……………(6)  
野菜試験場久留米支場栽培研究室長 本多 藤 雄
- § 総合需給率は1%伸びたが  
カロリーは17年ぶりに低下……………(8)  
～49年度の食糧需給速報にみる～

49肥料年度にはりん酸・加里成分とも、窒素成分の需要を上廻りましたが、これは最近の需給のみだれのためで、特別なものと思われず。

以上は一次工場から出荷された肥料の、量の統計を中心として申し上げたわけで、出荷ペースでは、48肥料年度の著増に対する、49肥料年度の反動減がみられますが、48肥料年度に出荷されたものの相当部分は、49肥料年度に入って利用されたとみられますので 実際に圃場に施された量は、むしろ、増加の傾向にあるのではないかと推定され、50肥料年度の実際の消費も、49肥料年度に比し増加するものと見ております。

出荷統計とは別に、肥料が実際にどう利用されているかと云うことになりますと、個別の事例は別として、なかなか把握しにくいのですが、農林省で毎年都道府県から肥料の需要量の見込等について報告を求めていますので、それについて申し上げますと、50肥料年度の見込では作物別の消費の割合ですが、全国合計で3成分とも稲の消費割合が最も多く、次いで野菜、果樹、草地の順となります。

なお、これを窒素成分について地域別にみますと、北海道では草地用の割合が最も多く、次いで稲、野菜の順です。東北では稲、野菜、果樹、草地の順で全国計と同じようになっています。関東では稲、野菜、桑、果樹と、桑の需要が目立ちます。北陸では稲、野菜、果樹について林地の順となっています。東海および近畿では稲、野菜、果樹について茶の順となっています。中国、四国では稲、野菜、果樹、飼料作物の順です。九州では稲、果樹、野菜、飼料作物の順で、中国、四国とは果樹、野菜の順序が入れ代っております。

次に10アール当り施肥量を全国平均でみてみますと、窒素成分では茶が42kgと最も多く、次いで桑26kg、野菜24kg、果樹20kg等となっております

同じように、りん酸成分では茶が22kgと多く、次いでタバコ20kg、野菜19kg等がこれに次いでいます。加里成分では、タバコが24kgと最も多く、次いで茶21kg、野菜18kg等となっています。

なお、水稻については10アール当り、窒素成分9.5kg、りん酸成分9.9kg、加里成分8.9kgとなっており、これは、49年産水稻生産費調査結果から算出した10アール当り施肥量がそれぞれ9.9kg、

10.2kg、9.0kgであるのにくらべ、やや低くなっております。

肥料の需要実情は以上の通りですが、これに対する肥料の供給事情をつけ加えますと、50年4月1日現在での生産能力は、アンモニア約443万トン(NH<sub>3</sub>)、りん酸液約87万トン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)であり、ほかにより成りん肥が実数で約95万トン、また過りん酸石灰が49年4月1日現在ですが、これも実数で約252万トンとなっております。

#### (今後の問題点)

一般政府は、昭和60年度を日標年次とする農産物の需要と生産の長期見通しを作成し、農政審議会の答申、閣議決定を経て公表しましたが、60年の生産見通しにこたえるため、肥料の需要量をどう予測するか、これが今後の需給面からみた大きな課題です。

このためには、今後見込まれている農作物の10アール当り収量の増加を達成するため、肥料の10アール当り施肥量をどう見込めばよいのか、単位面積当り収量増加に対する肥料の寄与率を、作物別にどう見込むのか、いま行なわれている土作り運動の効果が、化学肥料の消費にどのような影響を与えるのか、肥料の種類がどのように変化するか、需要の側から、供給の側にどのような肥料を要求すべきか、等々検討すべき点が多く残されています。

また、肥料の府県向出荷量は49肥料年度で600万トン、石灰質肥料を入れると800万トンくらいとみられますが、このように大量の物資の流通を如何に合理的に行なうか、流通の合理化も大切な問題になっています。

#### ことしの農林省予算

51年度予算は昨年末閣議決定をみたが農林省予算は総額2兆4,129億円で、前年比10.9%の伸びである。このうち食糧管理特別会計の関係は9087億9600万円ではば前年度並みである。

50年度の稲作転換対策が、水田総合利用対策と名称をかえて856億円を計上。これは過剰傾向にある米の生産を抑えて麦や大豆などの生産を増やそうというものである。この対策費のほかに水田裏作としての麦の作付には10a当り5,000円、総額で47億円余の奨励補助金を計上している。

また大豆生産振興奨励補助金も10a当たり2,500円を3,000円に増額し、水田裏作として飼料作物をつくる場合も、麦と同様に10a当たり5,000円の奨励補助金を計上している。